

自治体職員として、 そして労働組合の一員として

磯村 和佳子（名古屋市職員労働組合執行委員長）

I.はじめに —あの日から変わった

2024年1月1日午後4時。正月の穏やかな午後、石川県津幡町の実家で、家族全員の携帯が一斉にギュンギュンと警報音が鳴りだしました。テレビ画面が切り替わり、赤いテロップが流れました。

——緊急地震速報。強い揺れに警戒してください。

その言葉を読み切る前に、家全体がきしみながら揺れ始めました。食器棚から茶碗が音を立てて転がり、私は母の頭を抱えてその場にしゃがみ込むことしかできませんでした。テレビからは「逃げて!」というアナウンサーの声が連呼されました。どれくらい揺れたかははっきりわかりませんが、とても長く感じました。揺れがおさまり、震源が石川県能登沖と分かったとき、「とうとう来てしまった、しかも石川で」と思いました。

余震があるたびに、母を連れ外に出ると、近所の人たちも家の外に出ており、皆、顔を見合わせ「大丈夫だった?」と声をかけ合いました。遠くで町内放送のサイレンが鳴り響いていました。町内放送が何かを伝えていますが、音が割れついて聞き取れませんでした。家族と「できることをやろう」と、まずは断水に備え浴槽に水をため始めました。夜になっても余震は続き、玄関の戸が歪んで閉じ込められるのを恐れて、一晩中開け放しました。冷たい風が吹き込みとても寒かったです。家族全員、いつでも外に出られるように、こたつの周りで雑魚寝をしました。一晩中、テレビに映る輪島の朝市広場の火災を数人の方が消火する映像をぼんやり見ていました。

II.被災地支援:名古屋市と労働組合の初期対応

翌日、昨夜からの断水が解消したこともあり、名古屋へ帰ることにしました。戻る途中寄った加賀の大型スーパーは地震の影響でガラスが割っていましたが、一部でも営業を行ってくれていました。高速道路では、能登へ向かう様々な支援の車両（給水車、仮設トイレを積んだ車など）とすれ違いました。

組織としての支援開始

名古屋市でも災害対策本部が立ち上がり、すぐに消防局、上下水道局、環境事業所などが支援に入りました。労働組合として、現地に支援に入る職員の働き方や特勤・超勤手当の確実な支給について市側と随時交渉しました。現地での活動は過酷であり、職員の健康と生活を守ることが支援の継続につながり、また義援金の呼びかけも始まり、自治労連を通じ被災地へ送られました。

支援を支える職場の実態

各職場から支援に行きましたが、支援に送り出す職場も人員が減らされギリギリの状態です。月に100時間を超える超勤をしながら職場を守ってくれる職員もいました。区役所支部では昼休みに報告会が開かれ、支援に入った職員がスライドで被災地の様子を伝えました。これまでに延べ4000人の職員が支援に入りました。今年度、長期で支援に入っている職員もいます。

III.被災地で見えた行政の空洞化 — 合併と委託の影

石川県はこの20年間で、40を超えていた市町村が20ほどに減らされました。効率化の名のもとに合併が進み、自治体職員数も大幅に削減されました。

災害ごみ収集の過酷な実態

名古屋市環境事業所から災害ごみの収集に派遣された職員からは「道路の亀裂・寸断をはじめ、土砂崩れ、家屋の倒壊、断水、停電といった状況で、役場は被災者支援で手一杯となり、ごみの収集体制はありませんでした。ごみ処理施設も震災の被害で工場が稼働できず、施設内にごみが堆積していたため、そのごみと各避難所のごみを収集し、金沢の処理施設へ片道100キロ、大渋滞している中4時間かけ何回も搬送しました」と報告がありました。

委託化による災害対応の機能不全

中能登町のエリア収集では現地の担当者は2人。業務の多くが委託され、収集ルートやごみの集積場が分からず、住民の生活の状況を把握しきれていませんでした。紙の地図をもとに自分たちでルート地図を作成し、慣れない雪道を回り、災害ごみを片道2時間以上かけ焼却場へ運びました。委託業者が仕事を再開できたのは10日ほどたったころでした。「うちちは一袋いくらの契約協力して作業はできん」「契約以外のことはできん」と言われ、支援を終えています。

業務の効率化が進んだ結果、災害時に最も非効率な構造が生まれていると感じました。直営の現業職員がいれば、現場判断で即行動できますが、委託業務では「契約外」「責任範囲外」が壁になり、災害時には機能しなくなることもわかりました。

IV.ボランティアとしての長期支援の記録

5月10日、能登半島地震から4か月。初めてボランティアに参加しました。金沢から電車で1時間ほど。羽咋市に能登半島地震被災者共同支援センターがあります。全国からの物資や義援金の受付、

仮設住宅への物資配布など全労連・各単産・地方組織からのボランティアが3日間で81人、全国から集まり支援に入りました。北は秋田、南は沖縄から労働組合の仲間が集まってくれました。

センターにはレトルト食品、冬物衣類、カイロ、乾パン、衛生用品——全国からの支援物資が集まっていました。段ボールひとつひとつから「個人としての思い」が伝わってくる気がしました。その力が、行政支援の届かない「継ぎ目」を支えているように思いました。

1.珠洲市への道のりと孤立した集落（5月10日/1日目）

1時の打ち合わせで配車の手配をし、1台に数人ずつ乗り合わせ、のと里山海道を2時間半かけ珠洲へ向かいました。地震の影響で道路はズタズタで、4か月経過しているにも関わらず反対車線を使い片側通行をしている状況でした。道路が波打ちアップダウンがあり、ヒビが入ったところは段差になりスピードが出せず、運転者・同乗者は座席で跳ねながらの道中、12台連なっての移動になりました。陥没した道路に車が落ちたままになっているところや、道路の再建に向け重機を使い懸命な作業中のところもありましたが距離にすればごく一部で、全面再開にはまだまだ時間がかかるのは容易に想像されました。なぜまだこんな状態なのか、国あげて復興しているように全く思えませんでした。

珠洲市蛸島町の現地は断水・停電が続いているため、能登空港でトイレ休憩し、避難所生活の被災者と現地で待ち合わせをしました。海沿いの被災者宅のあるところは、時が止まったように倒壊した家がそのままになっており、遠くで1台の重機が家を解体している音が聞こえるのみで、倒壊した家の中をスズメやカラスが飛び交い、その鳴き声がのどかでさみしく聞こえていました。自治労連のグループは被災者から困っていることの聞き取りがメインでした。倒壊した現地を歩き回るも、人影はありません。停電・断水のところにそもそも住んでいる人はおらず、ゴーストタウン、時がとまった街のようでした。

通りから1本裏に入つてみると、ようやく70代の漁師の男性に話を聞くことができました。「地震がおきた時は風呂にいた。津波が来るかもしれないと思い、裸のまま風呂から飛び出し、服を急いで着て家族には中学校へ行くよう言って、自分は近隣の人に声をかけながら走つて保育園まで逃げたが、誰も集まっておらずそこから中学校まで走つた。中学校の3階に上り避難した。ここは誰も取材に来ない、取り残されたところ。もうすぐ家を取り壊すことになっているが、家の中に入れず、家具や必要なものを持ち出せない。仏壇も大きく玄関から出せない、家と一緒に壊すしかない。港の船だけは無事で、それがうれしい。現在は仮設住宅に身を寄せている。別のところに家を建てることになると思うが、息子にまかせている。家の前の道路もヒビが入り歩けない状況で、歩けるように砂利を隙間に入れてもらった。」ボランティアの利用については「息子にまかせてあるから」と話されていました。

近くの、2023年既に統合され閉園となった保育園の園庭に仮設住宅が作られており、園舎は被災者が出入りする様子が見られました。通り道で名古屋市上下水道局の職員が作業しており、エールを送ることができました。いまだ断水の状態から、2時間滞在し切り上げることになりましたが、復路はのと里山街道が使えないため、海岸沿いの下道を3時間かけ羽咋のセンターまで戻りました。支援時間より移動時間の方が長く、もどかしさを感じました。

2.能登町での家財搬出と高齢者支援の課題（2日目）

珠洲より手前の能登町は2時間ほどで到着し、コンビニの駐車場でお弁当を食べ支援先へ。愛知からのチームは、巨大なイカのモニュメントのすぐ近くの料理旅館の取り壊し前の家財など運び出しを行いました。発災時、ものすごい揺れが襲い、家の外にいた方はすぐ近くの植木にしがみついたそうですが、身体は振り回され、しがみついているだけで精一杯だったそうです。津波が耳の高さまで来て、港にとめてあった船は陸に押し上げら

れ、また海に沈んだ船もあったそうです。停電・断水し、道路も崖崩れで寸断され孤立地域となりました。近くのホテルの宿泊者が目の前のパーキングエリアへ車で40台ほど押し寄せ、建物の裏側には排泄物が堆積し、ひどい光景だったと話してくれました。息子さんが旅館の敷地内にカフェを開店する直前に津波の被害を受け、めちゃくちゃになった店を見たとき、「涙も出ず茫然とするだけだった。息子はここで生活することをあきらめ、金沢で仕事を探し始めた」ということでした。また道路が寸断されていたため、海からクレーン車が運ばれてきて陸に上がったイカ釣りの船は海へ、海に沈んだ船は引き上げられたそうです。

旅館を解体するために津波で濡れた家財や大量の食器、畳などを運び出しました。運び出したものを自ら集積場へ運び込まなければならず、高齢の方々は外へ運び出すことも、集積場へ運び込むことも無理だと思いました。集積場に持ち込むときは細かく分別しなければならず、分別してなければ受け入れてもらえない状況でした。役場にボランティアを申し込んでもすぐには来てもらえない、ボランティアが来る前に現場の写真を撮りに来て、来てもらえるのを待つということでした。「沢山の人で来てもらえて本当に助かります」と喜んでもらえましたが、この日、私たち以外にボランティアの姿を見ることはませんでした。

3.輪島市街の観察と被災者の声（3日目以降の活動）

【3日目:輪島市街の観察】 輪島に入るために向かう途中、がけ崩れの多さに驚きました。山という山、崖という崖が崩れ山肌がむき出しになっており、山藤が咲き乱れ木々がなぎ倒されている姿が余計に痛々しく感じられました。市街地は崩れた家が目立ち歩道も亀裂が入ったまま観光地の面影は全くない状態でした。トイレ休憩のため家電量販店やドラッグストアなどに分かれて立ち寄りましたが、断水が続いているため仮設トイレの利用でした。朝市通りは大規模な火災のあと、まったくの手つかずの状態で、一面焼け野原、焦げ臭い匂いが充満しており、戦争中の町へタイム

スリップしたような不思議な感覚に襲われました。自由にその中を歩け、規制線も何も対策がとられておらず、手つかずの状態でした。すぐ近くの海岸に行ってみると、海岸が隆起し、船の接岸部分が大きくはがれそのままになっていました。

【5月31日:能登町】 いつあるかわからない公費解体ですが、家財の搬出支援を行いました。家主の女性は、半壊の家の1部屋に寝泊まりをされており、だんだんと家の傾きがひどくなっている状態でした。「家を解体できたら、またここに小さな家を建て、家を守りたい」と話されていました。長年住んだ家の家財は、思い出のあるものばかりで、処分するかどうかを決めきれない気持ちに寄り添いつつ、一つ一つ聞きながらの搬出になりました。傾いていてもそこに住んでいる人は避難者として数えられていないということでした。

【6月1日:志賀町赤崎】 きれいな海、鳥がさえずる、本当にのどかな志賀町（富来）の集落の一軒での家財搬出支援です。車が家の前まで入らず、大きな家財を一輪車と押しぐるまで通りまで運び出しました。公費解体は1年待ち、2年待ちの状態です。支援に入る前に志賀原発の前を通過しましたが、大きな地震がここで起こったと思うと恐怖を感じました。あの日、津波が何度も押し寄せたはず。津波は押し寄せるより引く時の力が大きいそうです。何の被害もなかったのが信じられませんでした。

【6月29日:株洲市】 震源地から数キロのお宅で公費解体をするための家財搬出の支援に入りました。半年たちようやく仮設住宅に入れることになった。家が傾き、元日から車庫に避難。家から畳をなんとか運び出し車庫に引きつめ寒さをしのいだそうです。自家発電機と水は地下水を利用。「仮設住宅の文句言う人がおるけど、4畳半2部屋、天国や」の言葉が切なかったです。

【6月30日:能登町での聞き取り】 被災者の話を聞く機会を作っていただき、イカキングで有名な「つくモール」でお話を聞きました。国公の組合

員さんだったTさんは、大阪の税務署で42年働き退職を機に能登町へ帰って来られました。地震災害で発生したゴミの収集・区分け作業に従事されており、「仮設住宅へ持つていけないためか、新品同様の家具が次々と持ち込まれます。また高額で購入されたと思われる輪島塗の御膳やお椀などの調度品や思い出の品など全てが持ち込まれる。多くの知人もやって来ますが、その度にかける言葉を探します。わずか数十秒の出来事で今後的人生設計が大きく狂わされた方々の何と多いことか…。自然の破壊力の凄まじさを思い知らされます」

震災後3か月。「阪神や東北大震災では車や人が行きかい復興に向けて活気に満ち溢れていた。しかし、能登半島の付け根から切り離されたみたいだと…。ひとつ救いだったのは、大きな痛手を受けた株洲市に原発がなかったこと。もしそこに原発があれば、被害の大きさは計り知れないものになつたはず。この地震大国日本に原発は要らないと強く思う。この故郷の大地・大自然の魅力を必ずや後世に残していきたい」と。

東京で教師をしていたが退職を機に帰ってきたIさんは、「地震後10日間だけ避難所の生活をした。発災後すぐ高台にある学校へ駆け込んだ。津波で体が濡れており、暖をとるために子どもたちの給食のエプロンやカーテンを体に巻き付けて寒さをしのいだ。日本は何度災害が繰り返されても、何も変わっていない。避難所は次の場所に行くまでのしのぐ場所、我慢するところ。人権感覚が変わっていない。食費は1日1000円という予算。1.5次避難や2次避難をする人たちは、どこに避難するかをバスに乗るまで知らされなかった。囚人のような扱いだった」と話されました。

【9月28日、29日:輪島市黒島】 21日に発生した豪雨の被害を受けた高齢者施設のため、2日間で1000個の土嚢作りに支援に入りました。施設の横を流れる用水路があふれ、あっという間に浸水。入居者を避難させる場所もないとため、次回豪雨が来た時のため土嚢を積むことになりました。ここは最大隆起4mがあった場所で海岸線が大きく変

わったところです。海のすぐ近くにマンモス仮設がありました。ゴミの集積場が200メートル先にしかなく、高齢の方はゴミ出しが大変ということでした。自治会がなく、自治体も仮設住宅に入ってしまうと、その後のことには手が回っていない状態です。

【10月26日、27日:輪島市町野町】 私が心配していたことが起きました。9月21日の豪雨です。15人が亡くなりました。能登半島ごと地震で揺さぶられ、山々・道路がズタズタになっているところに、これまで経験していない雨。これは国・県などが全力で復旧にあたってこなった結果だと思います。被害が大きかった輪島市町野町へボランティアに入りました。集落を流れる川は全てあふれ、山はいたるところで崩れていきました。もちろん断水、自家発電を使っている状態です。豪雨の被害で報道されていた「もとやスーパー」の泥かきに入りました。泥は重く硬いプリンのようで、隙間という隙間に入り込んでおり、泥かきは大変でした。11月から店の再開はできないが、ボランティアや支援の拠点にしたい、きれいにしたいということで、スコップでは細かいところの泥はかき出せず、最後は手でかき出しました。ボランティアが炊き出しをしていましたが、出来上がりの合図の太鼓が鳴ると、買い物かごを持った高齢の方がたくさん集まってきた。まだ住んでいる方がたくさんいることがわかりました。

【11月30日、12月1日:輪島深見地区】 自治労連単独で取り組んだ輪島深見地区への支援。泥かき、家財の搬出です。豪雨から3か月も経過しているにも関わらず、集落の中を流れる川は、大きく崩れほとんど手つかずの状態でした。泥かきもまだまだの状態でした。2007年の能登地震でも被害を受けており、その時建てた家を今回解体することになり仮設住宅生活を余儀なくされています。84歳の家主の方は、以前は漁師、今は海苔を作り生活をされていましたが、この地震と豪雨で海面が大きく隆起し、その仕事もできなくなりました。「今更ここを出て、行くところはない」

と話され、何度も被害にあっても自然と折り合いをつけ前を向いて生活をされる姿に胸を打たれました。

【6月28日:千手院29日:町野町】 2000年の歴史のある千手院というお寺に支援に入りました。地震で落ちた瓦を割って、敷地内に敷き詰めるという作業でした。瓦が落ちた屋根が修復されたばかりですが、落ちた瓦は敷地の隅にうず高く積まれていました。瓦を金槌で細かく碎き敷地内に敷いていく作業は瓦を割る時のカーンカーンという音が響き、また手から瓦を割る時の振動が頭に伝わりめまいがしそうな瞬間もありました。暑い日でしたが大きな椎の木の下で作業ができ助かりました。

二日目は町野町の用水路残土除去とイノシシ予防の電気柵の設置の作業でした。

この地区では、周りの山々のがけ崩れと豪雨での川の氾濫で、転出してしまった住民が多く、現在4世帯しか残っていないということでした。田畠のイノシシ被害が深刻で電気柵の設置をしました。大人数で支援に入ったため短時間で設置ができ、Yさんは喜んでくださいました。困難な生活の中でも前を向いて生活されている方の支援ができたことは励みになりました。

V. おわりに

珠洲市で保育士として働いていた友人は、地震後、生活ができず退職をし、金沢の息子さんの家に身を寄せました。彼女の気持ちを思うとつらいです。能登に住みたい、帰りたいと思いながら避難している人たちが大勢いる中、ただつましくそこに住みたい、生活したいという願いがかなわない。私たち国民ひとりひとりの人権が大切にされていない、尊重されていないことのあらわれです。ライフラインが確保され、生業支援、病院や社会福祉施設、スーパーマーケット等が整備されない限り、戻れないことは明白です。

能登支援ボランティア参加して思うことは、能

登の皆さんのがやさしさです。腹の中は煮えくり返つとる（怒っている）かもしれません、「市役所の窓口で職員に怒りを表す方はほとんどいなかつた」と派遣された職員がみんな話します。もっと職員に困っていること、思うこと、辛いことを伝えてほしいと思います。そして住民のために住民と一緒にその声を県や国に伝える職員を増やしたい。市や県は復興のためにこの間減らされ続けた正規職員をたくさん採用してほしいと思いま

す。

住民のいのちと生活を守るため、今後おこるかもしれない災害に備え、全国の労働組合と連帯して人員増を求めていきたいと思います。また被災者の医療費窓口負担免除、介護サービスの利用料免除の再開を求める運動を一緒に進めていきたいと思います。

（いそむら わかこ）